

## —挑戦！太平洋で 1.5 mm の卵を探し当てろ(前編)

徐々に涼しくなってきましたが、夏バテは大丈夫ですか？日本人は、特に東濃地方の陶器関係の人達は、暑さにより夏バテ対策にウナギをととても多く食べています。その愛すべきウナギの卵が発見されたという記事が、2011 年 2 月に一面で大きく報じられました。「今まで解らなかったの？」と首をひねった人も多いと思います。その研究が成就するまでの経緯について書かれた記事(<http://goo.gl/J8Zud>)があったので、一部抜粋して前中後編で紹介します。

日本人にとって最も親しみ深い魚の 1 つといえば鰻(ウナギ)ではないだろうか。食べれば美味な上に栄養満点。その姿を見れば、によろによろとどこか愛くるしい。だがその反面、ウナギの生態は長らく謎に包まれたままだった。川を下ったウナギは、大海原のどこで次の世代を誕生させているのか。ウナギとは、近くて遠い魚なのだ。そんなウナギの回遊の謎を追いつづけてきたのが、東京大学大気海洋研究所教授の塚本勝巳教授。2011 年 2 月の、塚本教授らの快挙を伝えた「ウナギの卵ついに発見」というニュースは、まだ記憶に新しい。前篇では、まず、鰻の食文化の歴史をたどってみる。さらには、ウナギの故郷といえる産卵場の謎を突き止めるため、塚本教授がとった科学的推理と仮説の数々を紹介したい。(中略)まず養殖されているウナギも、海から川へと遡上しようとする体長 60 ミリほどの「シラスウナギ」を採ったもの。養殖ものも、元をたどれば天然ものなのだ。その天然シラスウナギでさえ、2000 年に入り、極端な不漁が起きている。(中略)そもそも、ウナギがどこでどのように生まれるのか、その詳細はつい最近まで分かっていなかった。これほど人に愛されつづけてきたウナギでありながら、その生態は長らく謎に包まれたままだったのだ。ウナギが卵を産む魚類であることや、海で生まれ、川で育ち、産卵のためまた海へ戻ることは分かった。だが、根本的な問題として、研究者たちはウナギの産卵や孵化の現場を突き止めることができないでいた。天然下で産卵や孵化(ふか)がどう行われるかを知ることは、生物の生態を把握するのに欠かせない。「旅の出发点であり終点でもある場所が分からなければ、やはり回遊の研究にはならない。まずはウナギの産卵場を研究することからだと思いました」塚本勝巳教授は、天然のニホンウナギの卵を採取するという研究の発端をそう話す。太平洋の大海原から、1.5 ミリしかないニホンウナギの卵のありかを突き止めるという途方もないプロジェクトだ。だが、緻密な戦略があればこそその研究だったことが塚本教授の話からはうかがえる。それはあたかも推理を重ねて「ホシ」を追い詰めていくミステリー小説のような物語だ。

1)ウナギは好きですか？

( )

2)太平洋で 1.5 mm の卵を探し当てるプロジェクト。あなたの配偶者・家族が言い出したらあなたは どうしますか？

[ ]